
最初で最後

あい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最初で最後

【Nコード】

N3111I

【作者名】

あい

【あらすじ】

幼馴染に恋をしてた。叶わぬ恋だろうと思ってた。幼馴染の位置、そこからは何も始まらない。そして終われない。社会人になって二年目の永遠はある事をきっかけに変わろうと動きはじめる。

プロローグ

「^{せいじ}征治。 お願いがあるんだけど」

「あ？ なに？」

激しいアクションが繰り広げられている場面から目を逸らさずにいるのはいつものことで。

わたしは、征治の端正な横顔を見つめて大きく息を吐いた。

拳銃の効果音や車のブレーキの音や何やらが激しくスピーカーから聞こえてくるのに、わたしの声を拾ってくれるのはありがたいと思う。

三人掛けのソファーに二人座って征治との距離は50センチメートル弱。

音量よりも自分の心臓の音の方が煩いと感じるのは致し方ないこと。

頬は強張り、指先はずっと震えてる。

「で、なんだよ？ お願いって」

「う・・・ん」

早く言わないときれちゃうだろうな。

気は長い方ではないし、顔の割には口は悪いし、行動も荒い。

「おい、えら・・・」

「わたしを抱いて」

わたしは征治の言葉を遮って、このところずっと考えていた言葉をやっとなににした。

勢いをつけて言ったせいで、声は多少なり大きかったからばつちり聞こえたんだと思う。

だけど征治は画面を見たまま一寸たりとも動かない。

聞こえなかった？ な、ことないよね？

動悸がすごい音を立てて、顔中に火がついたように熱いのに言っ
てしまえば楽になって、なんだかホッとしてる自分がいる。

征治は動かないままで、スピーカーからは意味不明の英語。

そして妙な間。

「は？」

ブリキのように征治の顔が動いて、切れ長の眼が大きく開いてる。
征治の綺麗な顔。

滅多に崩れることがない顔が、呆けたなんて言うか、アホ面に変
わってる。

だけど、その顔がその瞳が私を映し出し、ゆっくりとまゆが寄っ
ていく。

「だから、抱いて。 じゃないと先に進めないから」

第一話 / 変わらない日

《いい加減に住んでる場所おしえなさい!》

かすがとわ

春日永遠はメールを眺めながら苦笑いした。

送信者は永遠の母親の、幸恵さちえである。その間にバイブレーターが震え、受信を知らせ母の名前を表示した。

《せいちゃんはまだ気づいていないし、気づいたところで言いつけ通りに約束は守るわ。真理子さんも気づくまでは言うつもりはな
いって言ってたし、そこは安心してよいから。真人まなこさんも心配し
てる。》

両親の心配はもつともであった。

一人娘が二週間前に ” 環境を変えたい、一人暮らしがしてみたい ” と、ただそれだけの理由を述べ、ポストンバック一つで家を出たのだ。

幸いな事、父親の真人は出張で家を空けていたし、母は頭ごなしに反対をする親ではないので、ある程度の事情を説明し気持ちを理解してもらい 「親の有り難味がわかる機会かもね」 と、送り出してくれた。

契約金、保証人要らず、家具家電付きのウィークリーマンション。
自宅とは間逆の位置。

ただ、それだけを告げて。

「ホームシックにかかったちゃった?」

横から聞こえてくる声に、永遠ははたと気づいた。お昼を食べ終わって屋上に羽を伸ばしにきてた事を思い出した。

「寂しい？」

寂しくないと言えは嘘になるけど、私は首を横に振った。

「そう？」　なんて少し眼を細めてにつこりを笑うのは、会社の先輩で同じ年の大田深雪。おおたみゆき入社した時から公私混同と随分とお世話になっている。

一人暮らしがしたい。　離れたい。　と相談を持ちかけた永遠に「うちにくれば」　って言うてくれたけど、断った後に色々とアドバイスをしてもらい現在に至る。

「強がらなくてもいいわよ。　箱入り娘で24年間と一人住まいなんてしたことないでしょう？　何処に行くのも常に保護者付きで過ごしてきたんだもん。　寂しくないわけないわよね？」
「・・・・箱入り娘って・・・・保護者って・・・・」

箱入り娘ならば、一人暮らしなんて許してくれるわけがないと思うんだけど？　とは思っても口には出さずに曖昧に笑った。

深雪さんは、ため息をついた。

「だって門限は二十四にもなって十時とか、買い物には誰だっけ？　幼馴染のボディガード君付きだし？　それって箱入り娘って言わない？」

「・・・・だ、だって、お酒飲めないのに遅くまでいる必要はないって言うし、それに買い物行くのってそんなにないし、その時にたまたま征治と一緒に・・・・」

言うのが空しくなって止めた。

今は征治の話もしたくないし、門限が十時だったって事も本当だし、それを破った時もあったけど必ず征治と一緒にいたから……。

「一時有名だったよね。入社した当時のお迎え」

「……………」

「しかも相手はモデル並のイケメン君だったし？ 歓迎会の時でもしっか……………」

「深雪さ…………ん……………」

それ以上は言わなくていいと、懇願するように深雪を見つめた。

とても同じ歳とは思えない美人さん。仕事も出来て男女から人気者で営業課の花と言われる人。

気取ったところもなく、何かとドンくさいと言われるわたしをフオローしてくれる人なんだけど、今日はいつにもなく毒舌です。

彼氏さんと何かありました？

「喧嘩なんてしてないわよ？」

うわお！ 何も言っていないのに何でわかるの？

「顔に出てるわよ」

「……………」

思わず両手で頬を押さえた。

くすくすと笑い声が聞こえ「嘘よ」なんて言う。

からかわれたんだなと思って唇を尖らすと「そんな顔は、他で

しちゃだめよ？」なんてわからないことを言う。

「門限もなくなった事だし、金曜日だしご飯でも食べに行こうか？会社じゃゆっくり話も出来ないし、永遠も少しは落ち着いたでしよう？」

ニコツと笑うと見惚れるくれるに綺麗で、すらっとした身長は百六十五センチ、ヒールを履いたら七十は超える。五センチのヒールを履いても百六十くらいにしかないわたしとは違う。

羨ましいと言ったら、小さくて可愛い方がいいわよって言われた事があるけど、可愛いのは身長だけで顔はいたって平凡。

可愛いなんてお父さんやおじさん以外には言われた事がない。なんだか、言ってて空しいけど……。

「さて、さつさと終わらせて定時にあがるよ」
「えっ？」

深雪さんを見上げると、困った顔してじつとわたしを見た。そして、小さく首を振る。

「さっき言ったでしょう？ ご飯食べに行こうって」
「えっ？ 金曜日だよ？ 彼氏さんはいいわけ？」
「出張」
「……でした……」

誰も知らないけど、深雪さんの彼は営業課長だ。三十四歳にしてその地位、社内でも一番の出世背頭と言われている。聞いたときは吃驚した。

だけど、納得した。二人が並ぶとパーフェクト。課長ともそれなりに親しくしてもらって、知り合いの不動産を紹

介してくれたのは課長だった。

「ほら、時間！」

さつさと踵を返す深雪の後を小さくため息を付き、追う。

時計の針は十三時五分前。

七階から階段を駆け下りて4階へ。

変わらない日。

長く感じる一日でも、確実に時間は過ぎている。

まだ、気づかれていないことに安堵と切なさが入り混じる。

そして、ただそれだけの存在なんだなと改めて実感して、納得する。

あの日、から一度も逢っていない。

第二話 / 一網打尽

ざわざわと騒がしい店内。 笑い声やグラスを傾ける音。
襖一枚で遮った個室。
だけど周りに負けないくらいに騒がしい。

永遠は、水滴のつき始めたグラスを軽くお絞りで拭き、チビチビと舐めるように飲んでいた。

その顔は困惑し、少々と引きつった笑いを浮かべている。

「春日さん、飲んでる？」

びくつとしながら、首を立てた振ったがこれでは子供みたいではないかと 「はい」 と小さく返事を返したが、声をかけてきた本人は永遠の一向に減らないグラスへと視線を送り、ニコツと人のよさそうな笑みを浮かべ永遠を見た。

「ほんと、可愛いな春日さん。 この場に入れて俺はラッキーだよ」
「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・？」

怪訝そうな顔をするわけでもなく、きょとんとして相手を見上げた。

そもそも、何故にこうなっているのかは、さっぱりで夕飯へと誘ってきた深雪は目の前にいるどころか、向い席の三人を挟んだ場所にいるし、横には顔知り程度にしかないが、同じ会社の経理と総務の女性が座っている。

が、人見知りもあり場の雰囲気にとてもじやついていけなくて、声をかけてくる人だけにただ、返事を返すだけ。

「ちょっとお飯田さん！ 女性は春日さんだけじゃないんですからねえ。 たまにしか顔を出さない子よりいつも相手してる方にも気配りは見せてくださいよ」

永遠の横に座っている女性は、身体半分テーブルに身を出し飯田と言つ男に甘つたるい声を出しながらも引つかかる言葉を吐いている。

飯田は苦笑いしながら 「ごめん、ごめん」 とあつちに固まる席へ移動して行つた。

男女入り混じり十二、三人はいるだろうか。

永遠の働く営業の男性も二人、企画部やらと見知つた程度の顔ばかりは揃っているが、その意図がまったく掴めないままなんとなく気まづくなり、グラスへと視線を移した。

「なんで、貴方がここにいるの？」

ボソツと横から聞こえてきた声に顔を上げた。 確か経理の緒方さん。

「かつこいい彼氏がいても満足できなくて男荒らし？」

「・・・・・・・・」

「それともかつこいい彼氏にふられて、新しい男でも探してる？」

左からは総務の人。

自分に向けられているんだろうかと辺りを見回すが、聞いているのは自分だけだと気づいた。

皆、それぞれに酒を飲み摘みを摘みながら会話を楽しんでいる。 永遠を挟み女性二人は含んだ笑いを見せながら相槌を打っている。 それを交合に見て、意味がわからず首を傾げた。

「白々しいわね」
「ほんと」

前を見据えていた眼は、捉えきつい視線を向けてくる。

必要最低限にしか施されていない永遠の化粧とは対照的な化粧。
上を向くまつ毛に艶やかに塗られたグロス。

嫌味なく縁取られたアイラインは予想以上にきついと永遠には感じられた。

「彼氏いたよね？ その彼はどうしたの？ 今日はお迎えはないの？」

棘のある馬鹿にしたような言い方だが、お迎えと聞いた時点で恥ずかしくなり嫌味を言われた事を気に留めてはいなかった。

社会人にもなってお迎え等とはやはり恥ずかしいことなんだと改めて感じ、そしてそれはこれからはないと断言でき、胸の奥が鈍い音を立てて軋んだ。

彼氏ではない。

ただの幼馴染、家が隣同士で誰よりも近かった存在。
こうして離れてしまえば、なんの繋がりもない。

不意にこみ上げてくるものに永遠は、下唇をかみ締めた。

「ちょっと、聞いてるの？　なんで、貴方がここにいてるわけ？」
「あ、えっ・・・」

彼女の声は予想以上に大きかったのか、賑やかな場は一瞬で静まり返り、周りの視線は永遠達に注がれた。

永遠の横にいた彼女達はバツ悪そうに顔を伏せ、永遠は慌てて「ごめんさない」と言った。

「邪魔したのは俺ら。余計なのはお前ら」

それはとても低い声だった。

顔を上げて見れば、営業で永遠と組んで仕事をしている明津礼だあくつれいだった。

組んでといっても、彼の営業の補佐であり最近になって新しく組み替えられたもので、プライベートな話など一切なく、普通の営業に事務員といった関係だ。

シンと静まり返った場に誰かの喉がなる音がした気がした。

「そもそも俺らも呼ばれてなんかいなかったらしいがな」

明津は切れ長の堀深い目を細め、もう一人の営業課の横井を見やった。横井はウツと顔をしかめ視線を泳がして、深雪へと縋る様に助けを求めた。

深雪は深いため息をつき、永遠に困った顔を向けるとその顔を横に流した。

綺麗な笑みは、周りを凍りつかせる。

「ほんと、邪魔」

一網打尽だった。

「永遠以外に誰も呼んでもないのよね。どこで聞きつけたかしらないけど、拝み倒されて仕方なく返事すれば大人数」

深雪は座ったまま腕組し、「しかも場をしらけさせて、ほんとむかつく」と口にした。

ここには深雪よりも年上である女性も男性もいるが、誰も口出しできないでいるのは、氷のようは微笑みに違いない。

深雪は組んでいた腕を解き横に置いてあつたバックを取ると中をあさくり財布を出して数枚の紙幣を出してテーブルに置いた。

「これは、わたしと永遠の分。わたし達は帰るから後はお好きにどうぞ。永遠、帰るよ」

永遠は、ぼやんとして深雪を見上げている。
状況が掴めてないとか、なんとも愛くるしい表情で深雪は苦笑いする。

「帰らないの？」
「えっ、あ、帰ります」

慌てて立ち上がった永遠は、すでに入り口へ向かう深雪の後を追いかける前に、じつと明津を見た。

明津は永遠の視線に気づき「ん？」と首を傾げた。

普段はジツと見ることも、仕事外で話をする事はないに等しい。
笑った顔も怒った顔も滅多に見ることがなく、無表情に近く近寄りがたい雰囲気を出していて永遠には、明津と言う人間は苦手の部類に入っていた。苦手というより怖いという感じだ。

だけど、仕事は丁重で速くて、わかりやすく指示をしてくれる人だ。

助けてくれたんだよね？

「明津さん、どうもありがとうございます」

永遠は頭を下げた。周りの目は気にせずにただ、素直に。
深雪が後ろで満足気に微笑む姿も知らずに。

「永遠、行くよ」
「う、うん」

永遠は、もう一度後ろを振り返ってその場にとどまる皆に「お邪魔してすみませんでした」　ともう一度頭を下げてその場を後にした。

「馬鹿！　あんたが謝る事ないでしょう！　しかも邪魔したのはあっち！」　と襖の向こう側から深雪の声。それに反論するかのように「でも・・・」　と心細い小さな声は雑音に紛れ込み足音も聞こえなくなつた。

ピシヤリと閉められた襖をジツと見つめていた明津の顔に、滅多に見ることがない苦笑いが漏れていたことに誰も気づかなかつた。

「まいったな」　と囁いた声も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3111i/>

最初で最後

2010年11月10日10時52分発行